

去る7月13日(土)、研修活動の一環として東京学芸大学附属高校から生徒20名が本校を訪問し、二校による交流会を行いました。本校からは、昨年行った災害研究で運営指導委員の先生から高い評価をいただいた9グループと学術研究委員が4名の約30名が参加しました。

今回の交流会はSSHの活動の一環として行ったもので、本校は昨年度実施した災害研究の研究結果を発表しました。その後、グループに分かれ、テーマを設けて座談会形式で討論しました。また、東京学芸大学附属高等学校のSSHの取り組みの紹介もありました。本校とは異なった取り組みは今後SSHを実施する上で刺激となりました。3時間ほどの短いものでしたが、他校の生徒と学術的な交流のできる有意義な会でした。

交流会では、まず初めに本校の生徒による災害研究のポスター発表を行いました。最初はいつもとは違う環境に緊張や戸惑いがありましたが、時間が経つにつれて発表者それぞれが自分らしさを出すことができましたと思います。また、質疑応答でも本校生とは異なる観点からの鋭い質問もあり、中身の濃い発表会となりました。以前の発表から時間が経過し、自分の研究内容を再度確認したり、投げかけられた質問によって新たな視点に気づいたりするグループもあり、この発表を通して研究内容をより高める機会になりました。



次に全体を4つのグループに分かれ、1グループ10名ほどで「東日本大震災を受けての首都直下型地震への対策・考え方の変化」「これからの復興に向けて」という2つのテーマを掲げて座談会(討論会)を行いました。議論は風評被害や避難所・仮設住宅での生活等々、様々な話題に広がっていききました。活発な議論を進めていく中で、東京では非常時に人が密集しすぎて「人が原因で予測を超えた甚大な被害をもたらす」可能性があることを聞き、自分たちが想定できない被害が宮城と東京という地域の差によって生じることも改めて知ることができました。

〈編集後記〉

今回の交流会を振り返ると、特に座談会(討論会)が非常に有意義であったと思います。交流会が始まって時間が経つにつれて、雰囲気もほぐれ、お互いに積極的に発言して、意見交換ができたと思います。このような他校との交流の場はこれからも増えていくと思われます。そのような場では、討論しやすい雰囲気を作ることが、議論を進め・深めていく上では重要な要素であることを改めて実感しました。

また、このように発表する場を経験することによってプレゼンテーションの能力を養うだけでなく、普段とは違う方に見てもらい、緊張感の中で自分の発表をすることは研究を深める上でもとても重要なことだと感じました。

東京学芸大附属高校の生徒のみなさん、お忙しい中、本当にありがとうございました。

〈学術研究委員会副委員長 栗村〉